しむまへに信じた。彼が名譽を抱いた衷心に希望の意志があつた。創作家たらんとする希望でなく、藝術家たらんとするものでもなく又詩人たらんとするものでもない。唯偽らざる生涯、全一の生活を遂げやうといふ希望である。天地の偽なき、自然の公明なる、それが詩人の心である。その心に映ずるあらゆるものを歌ふのは詩人の機能であり任務である。詩人の聲は自然の谺であり國風である。吾人は唯この點に於て彼の面目を偲びてみなければならぬ。

本稿の參考書には唐宋詩醇、甌北詩話、白氏文集の外唐詩選、三體詩、白詩の註釋諸本を用ひた。彼の念にあること五年、終に暑中休暇を擧げて筆を執り今や漸く脱稿した。纖月落ちんとして蟲種々に啼く。筆を擱いて瞑想に沈む。——(大正七、十、八)——

清吉

一、二、丙　佐々木高遠

【I】

『もうし一寸お尋ねに上りましたがのう』と突然呼び掛けられて、今迄或勤口に付て色々空想を廻らしてゐた清吉は、夢から呼び起された樣にびくつとした。見るともう五十餘りの頭の禿げかゝつた爺さんが、尻をからげた儘逆上した樣な風で立つてゐる。水のぽたり〳〵滴つてゐる雨傘は擴げられたまゝ土間の片側に蟠つてゐる。外では相變らず雨が蕭々として降つてゐた。どこかの女中らしい女が片手に風呂敷包みを重たげに提げ乍ら通つてゐたが、折柄勢込んで後方から馳けて來た俥に驚いて道を避けた。バチャ〳〵と泥をはねる音はいつしか遠ざかつて消へてしまふ。

此處は場末の一支局、清吉はその局員である、物倦さうに鐵網格子の受付口に顏を寄せて默つたまゝ漫然と、差出された葉書に眼を注いだ。

『こりや息子から來たつぢやがのう。電報代用と云ふのは何ちふ意味ぢやろかのう。局で電報用紙の足らん時にや葉書でやらるゝこつもありますぢやろか』

『そんなことはないですよ』と突險貪に答へたが、その調子の如何にも煩ささうだつたのに氣付いて急に聲を柔げて語を繼いだ。『多分大至急と云ふ意味で書かれたんでせう。第一局で用紙の足らない樣なことはありませんからね』

『ない〳〵』(ない)は(はい)の方言である。

爺さんは隣の七さんから讀んで貰ふと狼狽の餘り、今何處に居るのだらうなど心配し乍ら直ぐ其の便りを持つて、局に聞いたら何か分るだらうと云ふ氣がして飛び出したのだつたが、さう云はれてみると自分の間抜けさ加減に今更恥かしくなつた。だがさればと云つて何を尋ねに來たのか又何を尋ねたらいゝのか我乍ら分らなかつた。爺さんは其の葉書を大事さうに眺むるともなく手に持ち乍ら茫然としてゐる。……よく見れば其の小皺の疊んだ顏や力の無い眼やこけた頰など何だか清吉にも見覺えのある顏だ。彼は頭の中で色々探つてみたが一寸浮んで來ない。

『爺さんの家はどこでしたね』

『ない』と爺さんは傾げた頭を心持下げた。『あの横町の角の八百屋ですたい』

『あゝ、さうでしたね、さうだ……』

……あの汚い下水に沿つた角の家だ。稍薄暗さうな店構へで、若いおかみさんがよく店先で迂散臭さうに通る者を眺めてゐるが、寄る人でもあると『へゐ〳〵』と馬鹿丁寧に愛想を振り撒く、清吉が大嫌ひな店である。爺さんはさう聞けばあの帳場の側でよく新聞など覗いてゐた當人だ。彼は急に好奇心が湧いて來た

『何やら御心配の樣ですな。何ですか、一寸も一つ見せて貰ひませうか』

『ない、實はどうも思案に餘つてる所なんで』と救船でも得た樣に其の葉書を彼に渡した。

先刻はよくも見なかつたが文面は大体かうである。

電報代用——昨夜到頭逃げてやりました。あんな分らずやの家によくも今迄辛抱した事です。門に唾を吐きかけて出て來ました。今頃は騒いでるだらうと思ふと痛快です。私は之から上京して是非共成功してやらねばなりません。至急十圓丈當地宛送つて下さい。但し兄上には當分内証に願ひます。

清吉は讀み行くうちに此の便りの主が何だか舊知の樣に懷かしまれた奉公先の虐待——出奔——上京——さう考へて來ると自分も其の人の爲に痛快を叫んでやりたい樣な心持になつた。あゝ出奔！何と云ふ壯快な語だらう。あらゆるものを振り捨てゝ單身未知の世界に突入して新生活を始めようとするのだ。寧ろ羨しい氣さへする。自分もこんな下らぬ生活を何時迄續けることだらう。

清吉が何時迄も默つて葉書を見詰めてゐるので爺さんは物足らぬかの樣に口を切つた。

『實はその一寸うちに呼び戻す譯には行きまつせんけん……以前から兄貴とは仲がようなかつた方ぢやがのう、嫂が來てからは尙更惡うがしてのう、嫂などには言葉も交さない樣な調子で——養子先にさへよう行きやあれも仕合せと思つとつ所が……いくら親がむつかしい云うたつちや、こんな無茶な事をする樣

ぢやこれから先が氣掛りで……』と爺さんは可哀相にもう其の衰へた眼をしばたゝいてゐる。清吉は『はゝあ養子だつたのか』と思ふ。

『幾歳になられるですか』

『ない、もう十九にもなり乍ら相變らず無分別なことばかりやりやがつて……』

十九と云へば彼よりまだ四つ丈年下だ。十九位で此の位度胸と覺悟が据つてゐるなんて偉い奴だ、將來屹度成功するに違ひないと、清吉は無闇と心の中で感服し續けた。何だか自分が決斷力がなくて實行し得ないでゐる希望を代つて行らうとしてゐる樣にも思へる。『彼の壯擧の上に願はくば祝福あれ』と飜譯物の文句其の儘心で呟いた。ふと氣付くと爺さんは尙しよんぼりとして受付口に立ち乍ら彼の助言を待つてゐる。清吉は勝手な妄想に耽つてゐたのを濟まなく思つた。けれども何と云つたらいゝか、自分の思つてる樣な事を云つたつて通じさうにもない。

『夫れはどうも御心配でせうな……』

『ない、兄貴に相談すりやあれが可哀さうで』

親のない清吉は親心の有り難さに思はずほろりとなつた。

『さうですなあ』と考へる樣に云つて出過ぎはせぬかと躊躇つたが思ひ切つて『いつそ望み通りにして上げられたらどうですか。どうせ家に歸られても都合が惡い樣だつたらなあ』

『ない……ばつてん、まだ十九にしかならんけん、どんなことになるか分らんし……』

よく考へると爺さんの云ふのも尤もだ。……雜沓してゐる公園の片隅のベンチに田舍出らしい若者が途方

に暮れて腰掛けてゐる狀が眼に浮ぶ、……すると勞働者誘拐を業にしてる紳士風の奴が親切に色々身の上を聞いて若い者の心を唆る樣に巧に語り出す。若者は知らず〳〵口車に乘せられて遂には鑛山や北海道等に送られ酷使されて半死半生の目に逢ふ……あゝほんとに自分は何と云ふ恐ろしい助言をしようとしたのだらう

『此の葉書はあれの仲よしの隣の七さん方宛に七さんのと一緒に來たつだがのう。七さんもあれの云ふ通りしたがねゝとさう云はつしやつたばつてん、何分……』と又考へ込む。……養子先に歸ることが出來れば一番いゝが便りの樣子ぢやそれも甘く納りさうにないし。あゝ、こんな年寄りになつてまで心配が絶ねぬとは。何だが頭ぐら〳〵する樣だ、あゝもうどうなつたつて仕方はねね、自分でしでかした事ぢで……と思ひ切つても又ぞろ懸念がむら〳〵と萠して來るのである。

爺さんはこんな所で何時迄もかうしてゐてはと葉書を懷に納めて『おほきに……』と禮を言ひ乍ら雨の巷に出た。雨脚はかなり烈しくなつてゐる。清吉はじつと其の後姿を見送つてゐた。其の便りの當人にしみ〴〵同情したが、彼にもどう判斷していゝかはつきりは分らなかつた。然し兎に角其の人を幸福だと羨まずに居れなかつた。あれ程案じて呉れる親があつたらなあとつく〴〵思ふ。戰死した父の後を守つて子供專念に暮してゐた母が突然赤痢で死んだのは彼がまだ小學校に通つてゐる頃だつたが、あの折の母の死顏や室の樣子がぼんやりと浮んで來た。親戚や知邊の人から慰められると却て悲しくなつて泣いたものだ。その時共に泣いた妹は今は遠い親戚に行つて久しく逢はぬ。喧嘩して泣いて歸つて來た時などに俯して泣いたあの暖い母の膝を思へば今でもなつかしくてたまらない。

『水田さん、なに考へてゐらつしやるの』といつの間に出て來たのか、八重子が局の事務室と奥との閾際に

立つてゐた。水田は清吉の姓である。清吉は飛んだ所を見られたと云ふ樣な狼狽を覺ゐて

『いーや、何か御用ですか』

『祖母さんがね、賴んで置いた手紙は出して戴いたでせうかつて』

『ゐゝ……と、多分……』と云ひ乍ら清吉は首を傾げた、此頃つく〳〵忘れつぽくなつたと思ふ。『いや確に出しておいたですから』

『何だか不確らしいのね、伯母さん宛のですよ』

『ゐゝ昨日確に出して置いたですからさう仰言つて下さい』

『ぢや、ありがたうございましたつて……。あら隨分雨がひどくなつたこと。でもやつぱり通る人はあるわねエ』と半ば獨語の樣に呟いて『御退屈でせう、御茶でも呑みにゐらつしやいな』と云ひ殘し乍ら引込んでしまつた。

八重子の姿が消ゐると、清吉は急に淋しくなつた樣に思つた。冬の夜更にかき起してゐた火鉢の火が突然消ゐ失せた樣な感じである。支局幾坪の薄暗い室は二並びの机やその上に載せた横長の書棚で尙更陰氣に見ゐる。此のせゝこましい一室にじつと停滯して微動だにせない飴色の空氣が自づと沈澱して、此のたびた机となり帳簿となり、やがて遂に凝固して彼自身と化したかと疑はれる。濁つた空氣澱んだ塵埃、光線も表の硝子戸より外に入る口がないのでまして雨天の日にはぼんやりと寢ぼけた樣な影しかさゝぬ。いつ掃除されたとも知れぬ裏町の下水を見る樣な、或は底知れぬ廢墟の古井戸を覗き込んだ樣な沈頽したわびしい感じである。はねた深夜の劇場の樂屋に五燭の電燈がひとり眠たげにともつてゐる樣な物足らない物倦い心持であ

る。……清吉が知邊の紹介で此處に來て毎日此の鐵網格子の内に坐る樣になつてからもうかれこれ六七年である。あれから一体何が變つただらう。椅子も相變らず古い椅子だし、秤りも錆が增したに過ぎないし……先年塗り替へた當座其の臭で往生した土間のペンキ塗りの板壁も今は見るかげもなく古びてゐる。否夫れよりも變らぬのは自分自身の姿である。此の長い六七年間の歲月を而も取り返しの付かない大事な青年期を、一躰どうして來たのであらう。親があり金がある御目出度い連中は、世間のせち辛さをも味ふことなくしてどし〳〵上の學校に進んで行つた小學校ではどうしても彼に追付き得なかつた連中が幾何がどうの代數がどうのとねらさうに口にするのを聞くと妬ましい樣な焦立たしい樣な心持がして、彼も到頭中學講議錄樣のものを取つたりしたが、實際見てみれば態々骨折つてやつてもさまで後に立ちさうにもないので中途で止めてしまつた。唯倦まず續けたのは文學書等の耽讀と文藝殊に詩歌等の勞作だけである。夫れも此の頃は頭がぼんやり靄でもかけた樣で、本など讀み出しても直ぐ飽いてしまふ。彼の机上には無造作に横へたペンやインキ等と一緒に今月號の雜誌が讀みさしの儘伏せられてゐる。

『あゝ』と清吉は覺ゐず欠伸をして脊を伸し乍ら差し上げた手でこつ〳〵と後頭部を叩いて、『あゝいやだ何と云ふ單調な生活だ』と口の中で呟いた。が其の折ふと例の勤口の一件が浮んで來た。一時或雜誌に投書してゐた關係から知合になつた彼の文藝上の友人で某專門學校に入つてる人と、夏休みの折は一緒にスケッチに行つたりしてゐたが、今後別るゝ時、

『いつそもうこんな生活は止めて思ひ切つて滿洲にでも行つてみようかと思つてゐるのですがねゐ實は小學の同窓が二三人中學を出てあちらに行つてるのですが、色々勸めて來るので、私もかうして何時迄も愚圖

々々してるより外國の土地でも踏んでみたらせい〳〵しさうな氣もするので……』と話したら

『さうですか、夫れは大した御奮發ですね』と云つて尙考へ乍ら、『だが樣子も分らぬ他鄕に行つて思はぬ苦勞でもされる樣ぢやつまりませんね』

『然し今の樣な物倦さに比べたら少し位の苦勞は却て淸凉劑だと思ひますよ。アカシヤ並樹の街道でシベリヤ颪の寒風に吹かれてみるのも感傷的か知らんがなつかしい氣がしますよ』

其の日は其の儘別れた。淸吉はまだ迷ひ半分に漫然考へてゐたこと乍ら、話す中に決心が段々固まつて行く樣な氣がした。そして斷然總てのものを振り切つて行くと云ふとにかなりヒロイックな快感さへ覺ねたのであつた。然し數日を經て其の友人から來た手紙を見ると忽ち先の勇氣も決心も根底から覆されてしまつた夫れは『滿洲等に行つてうまく行けばいゝが兎も角考へものだらう、万々一貴方の心が荒んで來る樣な結果になることはないかと餘計なと乍ら杞憂したりしてゐる。勿論一攫千金を夢みられてとは思はぬが態々遙々行かれずとも方法はあらうと思ふ。若し貴方がよければ成否は勿論分らぬが伯父が活動いてゐる金山の事務所へでも一應紹介してみようかと思つてゐますが……』と云ふ樣な意味の文言であつた。彼は其の暖い友情が泌々嬉しかつた。で早速感謝の返事を出して、『宜しくお賴み申します』、そして又自分は決して驕奢な生活などに憬れる者ぢやないと辯解してやつた。それからもう一ケ月以上になるがはつきり分らぬらしい。事務所へ都合を尋ねてやつてると先頃言つて來ただけである。彼には急に運ばぬのがもどかしかつた。どうせ駄目なら早く思ひ切つて心を落着けたいと思ふ樣になつた。學歷のない自分には餘りに僭越過ぎたことだと悲觀もした。然し色々事情もあらうしこちらの考へ通り捗るものでないことは淸吉も承知してゐるので、尙一

縷の望みを繋いで待つてゐるのである。そして退屈した時など未だ知らぬ金山なるものにひそかな憧憬を湧かしてゐたのだが、その憧憬は屢々彼の辯解を裏切つて金に心を煩はす要のない富裕な華やかな所謂幸福な生活へと走り勝ちなのであつた。

【Ⅱ】

此の頃どうも頭の具合が變だ。腐り淀んだどろ〳〵した血が凝滯し鬱結して頭を押へ付けてゐる樣だ。夫れかと思ふと又何だか熱を持つた膿が充滿して段々腦髓を腐蝕し糜爛させてゐる樣にも感ぜられる。清吉は寢乍ら覺ゐずこつ〳〵と頭を叩いて撫で廻した。思ひ做しか頭がどうやらぶわ〳〵する樣である。……此處も隨分古臭い室だと思ふ。ぼんやり眼に映つた天井の隅には蜘蛛の巢が張りかけてゐる。板に足の型が見ゐるのは建てた時の大工の足跡だらうか。まさか天井に態々足型をつける者もあるまい。と、ふと清吉は可笑しくなつて『ふゝむ』と笑つた。夫れは嘗て旅行の途上寄つた或温泉場の湯壺の上の天井に、何處の物好きがしたのか墨を塗つて態々押したらしい手の型があつたのを思ひ出したからである。……頭を向けてる方の街に向つた側は。格子窓になつてゐて、左に一間幅の型ばかりの床の間がある。何時懸け換へられたとも知れぬ麁末な掛物が相變らず默然として垂れてゐる。『養其大者爲大人』と靜に口の中で呟いてみる。此處の主人が之を懸けに來た際大變いゝ句だと云つて說明してくれた時には眞實有り難い敎訓の樣な氣もしたが、弛緩した今の心には氣の拔けたラムネも同然で何の感興も起らぬ。彼とは全く沒交涉な世界でだら〳〵と藥の廣告でも述べ立てられてゐる樣に煩さい氣がする。清吉はつと寢返りをした。

『水田さんはどうなすつたんだらう、もう九時過ぎだのに』と言つてる八重子の聲がその時下から聞ゐて來た。清吉は突然脊中でも突かれた樣にドキッとして現實に引戻された。一寸一瞬間八重子の聲故に特に不安なショックを受ける自分を冷笑したが、次の瞬間には又之とは違つた意味の不安な豫感を覺ゐ乍がら、耳を澄して返事を待つてゐたが聞ゐなかつた。只膳を片付けるらしい物音がしたばかり。おぢいさんは例の室で例の樣に新聞を見て居られるに違いない。おばあさんはまた裏に出て草花の手入や土いじりでもされてるのだらう。此のおばあさんは所在なさに時々餘計な草花の植ゑ替ゑなどやつて枯らしてしまふこともある。八重子は裁縫旁ら主婦代りにひとりで切り廻してゐる。此の七月に妻子と一緒に大阪の方の會社に轉勤して行つた此處の主人の兄の娘で十八とか九とか云ふことである。去年女學校を出ると結婚問題で親と折合はずに叔父に賴つて來たのだ。何でも父の勤先の上役の所望であつたが、彼の女は其の相手が遊ぶ人だと聞ひて、父が『若い時の放蕩は有勝なもので結婚すれば直るから心配無用。家もいゝしあの人も將來見込のない人ではないから』と是非行けと勸めたが斷然拒んで、向ふに居ては都合が惡いのでこちらに避難して來たのだと云ふ。其の話からも幾分想像される通り、彼の女はお轉婆ではなく淑やかな方だつたが意志の堅いはきはした女でよく年頃の女に見る樣な含羞みや遠慮などは殆ど無かつた。顏立は下脹れで血色がよく稍きつい感じがせぬでもないが悧悋さうな眼をしてゐて、まづ大して美人とも云へまいけれど、彼の女が始めて來た時には、前から噂を聞ひて好奇心を起してゐただけ、年長の此處の奥樣とは違つてやはり一種のアトラクションを覺ゐずにはゐられなかつた。然し何一つ學歷も能力も持たない自分にはとても戀など思ふ資格はない、唯こつ〳〵定つた事務を取るより外無いのだと、かねゞ〳〵諦めてゐる彼は、まして身分違ひの主人の姪に對し

てそんな空想をするさへ罪だと考へた。そして初心で臆病な彼は始は用の外此方から話し掛けることさへなかつたが、後には次第に或親しみの情が幾分くつろいだ感じを齎してゐた。だが其の點になると八重子は羨ましいほど自由で大膽で氣兼など藥にしたくもない樣な案配で、彼は度々彼の女と思ひ比べては反對に小膽な不甲斐ない自分を卿たずに居られなかつたが、彼がそんな風である丈主人夫婦は彼をしつかりした人間だと信用して、今度轉勤した折も此の地を離れるのを嫌ふ兩親と共に當分八重子に留つて貰ふことゝしたのである。其の後は主人の幼い子の甘ゑ聲や赤坊の泣聲が消えたのが殊更淋しい感じを與へたが、彼れには就中老人夫婦と若い者丈になつたのが一種恐ろしい豫感と不安を齎した。彼とて若い青年である以上、まして退屈な生活に何等か新しい刺戟や興味をと追い求めてゐる以上、異性に憬れ戀を戀うてゐたのは云ふ迄もないが身に附いた物一つない孤兒の身を思へば、空想界で享樂するのは兎も角現實ではやはり戀愛不能者であると考へずに居られないし、良緣がある迄家事を見習ふと云ふのが半ばの理由でこちらに來てゐる八重子に對しては尙更の事である。然し彼の女は其の後も相變らず彼がどんなことを考へてゐるかと云ふ樣なことには全く無頓着に隔てのない親しみを示した。彼れには夫れが嬉しくもあり又不安でもあつたと同時に、段々親みの情が濃くなつて行つて今では戀に似た思ひさへ湧くのを感ずるのであつた。彼は夫れを戀だと云ふより青春時代に有り勝な情愛だと見た。かの、相手の人格を奥迄見得ないで唯自分の手近に在る若ひ異性であるが故に覺える、青春期の盲目的感情だと考へた。そして彼は其の感情にあらゆる力を集めて反抗し撲滅しようとしたが、彼には大なる誘惑者である所の其の相手が同じ家に居る丈に、益々その努力は至難であつた。今ではもう其の自分の物で自分の物でない樣なわたいの知れぬ感情を持て餘して茫然とするより仕方が無かつ

たが、その一方には又『自分は何と云ふ意氣地無しだ臆病者だ、徒に老人臭い常識や世間並な因襲に捉はれて身動きも出來ないではないか。戀愛は天の與へた賜だ、なぜそんなに無闇に抑へよう〳〵と努めるのだ。結婚には財産などは第二義第三義第四義の末事だ、唯愛さへあればいゝのだ、互に深く心と心が抱擁し間隙の無い愛の上に二人が結合してゐさへすればいゝのだ』と、美的生活者の追求者である彼の心中のドンホアン（遊蕩兒）は叫んでゐた。この上此のドンホアンは彼の醜惡な邪念妄想の辯護者でさへあつた。彼はその分裂した心をどう處理していゝか全く無能であつた。子供の折雨上りの小溝で笹の葉に蟻を乘せて流した時のあの蟻の樣に、彼も亦呆然として潮の推移に流されてゐるより外に術を知らなかつた。彼には後には万事絶對的な眞はなさそうにさへ思へた、そして何時知らず懷疑へと落ちてゐた……。

一体此の三等郵便局は此處の主人が內職として引受けて妻や清吉にやらしてゐたのだが、今更中止するのも惜しいと云ふので清吉に托して去つたのである。局の勤めは多忙な時の外隔日に半日休みで、局員は彼の外に彼が仕込んだ十六になる喜作が――まだ田舍出の子供〳〵した少年だが――一人ゐて、八重子も折々手傳つてゐた。今日は此の二三日風邪で寢てゐた喜作が起き上つたので、彼は骨休めの折を得たのである。清吉は目覺た儘暫時取留もない思ひに耽つてゐた。近來は晩寢付が惡いので朝起きるのが殊更辛く感ぜられるのである。なぜか眠らうと焦れば焦るほど邪念妄想が執念く群つて來て寢付かれないのである。

いつか又うと〳〵してゐると、こと〳〵と階段を上つて來る足音がして眼がさめた。直覺的に八重子だなと思つたが、彼は依然として寢床に眼を開ひた儘ぼんやり天井と睨み合ひをしてゐた。八重子は上り口の所に顏を出して

『まだ眠つてらつしやるの』
『もう直ぐ起きますよ』と彼は答へたが急に起き上るつもりでもなかつた。
『どこかお惡いのぢやなくて』
『いや別に……』
『でも此頃何だか元氣がなささうだわ』
『少し頭は重い樣だが別にさう……』と少し起き直り乍ら云つた。
『ほんとに大事になさらないといけないわ。……あらさうでしたつけ山本さんが來てゐられますわ。直ぐ此處に?』
『ゐゝ……ぢやどうぞ』
清吉が着物を着て蒲團を押入に納めてゐると、八重子と入れ代つて山本の笑を含んだ顏が現れた。清吉も躰格は山本よりいゝけれど顏色は稍蒼い。
『おい、どうしたんだい。何時と思つてるんだ』
『少し氣分が惡い樣でね』
『ふむ、さう云や顏色が惡いね、引込み過ぎるからだよ』と、山本は格子窓と反對の南側の雨戸を繰り始めた。二階は東西に並んで八疊六疊の二間、六疊は喜作の室である。
『此の頃の樣に雨續きぢや出るにも出れんじやないか』
『出る考へがなくてそんなこと云ふのは僭越だぞ』

『出る考へがないことはないさ』と清吉は手拭と齒磨を取つて呟しさうに空を仰いだ。陽はもう大分廻つてゐた。久しぶりの晴天で碧く澄み渡つた空には一片二片の斷れ雲が綿をちぎつて投げた樣に浮んでゐた。大半落葉した裏の柿の樹には取り殘しの柿が橙色に熟れて光つてゐるが、中には烏でも嚙ぢつたのか變な形になつたり腐つて黑ずんだのも見ゐた。爽やかな風が吹いて來て清吉の頰を撫でた。

『金風颯々か、久しぶり野原にでも出てみるかな。……一寸食事して來るから雜誌でも見てゐ給へ』と机上に二三冊拋り出して、『君は晝食も今も何かい……』

『うん、習慣になつてもう別に欲しくもならないやね』と山本は答へて、『相變らず生意氣な雜誌を取つているな』と呟き乍ら、その口繪など覗いてゐた。

山本は清吉と仝樣此の市から餘り遠くない村の者で仝じ小學校に通つてゐた級も。年も一つ下だつたが此處の本局に出る樣になつてからはよく遊びに來て今では大の仲善しである。折々近郊にスケッチ旁々遊び廻つたりするのが二人の此の上ない樂みだつた。山本も清吉の感化で折々彼から小說など借りては讀んでゐたしんみりと物事を考へる樣な性質ではなかつた。

やがて清吉は『失敬した』と云ひ乍ら上つて來た。そして暫く一緒に雜誌をいぢくつてゐたが、思ひ出した樣に抽斗から繪葉書を出して『これどう思ふ』と山本に差出した。妙な繪であつた。五人の女が各飴色や樺色や桃色の薄布を纏うて手に變な物を持つて歩いてゐた。バックは青い海色地は褐色に塗られてゐた。その女は何れも妙な顏付で『信仰の悲み』と題されてゐた。然し何の意味か分らなかつた。顏もさまで悲しさうにも見ゐない樣であつた。山本は只不可解さうに眺め乍ら

『ふうむ、變挺な繪だね』と云つた。
『僕も始は大していゝとも思はなかつたが段々好きになつたよ。此の手に持つてるのは所謂智惠の實なんだね此のあかい衣をきた女なんか何だか氣に入つたよ、殊に惱ましさうに首を傾げてる樣子などは。』と清吉はしみ〴〵云つた。
彼女等はその美しく熟れた實を持ち乍ら食ふことを禁ぜられてゐるので惱ましさうにじつと手に支へてると云ふ趣向なのだ。
『ふうむ、僕にはこんな繪の値打は分らん』
『眼で見ようとするからさ。……云はゞ理性と感情の矛盾と云ふのかな』
『ふうむ』と山本は點頭いて尙見入つてゐる。
『僕には、だが、此頃何が何やら分らなくなつた』と清吉は掌で頭を輕く打つた。山本は彼の云ふ意味がよく通じなかつたが强ひて訊さうともしなかつた。
二人は尙雜誌や下から八重子の持つて來た新聞など見乍ら雜談してゐたが、やがて野原へと家を出た。
山本が『八重さんなか〴〵シャンだね』と意地の惡い微笑を浮べて云ふ。彼は急所を突かれた樣にドギマギした感じがしたが何氣なく
『ふむ、まあ惡い方でもなからうね』と答へると
『はゝゝゝ……惡い方でもないが、少々注意せエ』と冷かした。
清吉は『馬鹿云へ』と投げる樣に云ひ返したが、自分の意志を裏切つて面が赤くなる樣な氣がしたので、さ

りげなく側を向いて頗さうにぺつと唾を吐いた。そして山本が感附いたのかしらんそんな筈はないがと、自分の八重子に對する態度など思ひ返してみて、いやまさかさうぢやあるまい、そんな筈はないと、自分を安睹させようとするかの樣に斷定した。然し冷かした山本に勝者の快感があつたに反し、彼には當然敗者にされた不快を覺わずに居れなかつたが、やがて町を出て眼界が突然變つたので其の方に注意が移つて了つた。

郊外はやはりいつも乍ら氣持がよかつた。疎に續いた農家の庭にはコスモスや蝦夷菊が今を盛りと咲き亂れてゐるし、遠近の櫨の木はもう綠葉の間に鮮かな黃紅のもみぢを織り雜ぜて居、遙に見渡せば秋の山はくつきりと浮彫の樣に靑空に聳わてゐる。右手の森端れの社には眞白な幟が刻明な影を彫んでヒラ〳〵と風に飜つてゐた。

『秋だね』

『しみ〴〵秋だと思ふね』と二人は言ひ合つた。

彼には餘り語らうとしなかつた。清吉も、只眼丈はちく〳〵さゝれる樣な眩さを覺わたが、何だか急に頭がすつきりした樣な氣がしてゐた。風がサヤ〳〵と實つた稻や麥の穗に觸れ葉を搖がして吹き渡つた。此處では何の燥音もない、雜音もない、天地間のあらゆる音律がサヤ〳〵と云ふ澄んだ響に融合して流れ漲る樣に思はれた。

『こんな所に來るとつく〴〵あの狹苦しい局勤めが嫌にならあね、毎日齷齪として同じ事ばかり繰返してさ』とやがてさも嫌さうに清吉は言つた。

『そりやあ單調にや違ひないさ。然し偶に來るからこそこんな愉快は味はへるんじやないか』

『ふむ僕は然しもう何をするのも嫌になつた』と言ひかけたが、ふと思ひ出した樣に半ばは先刻の冷かしの辯明の意味で、『僕は近い中あそこを出るかも知れん』

『ね、そしてどうするつもりなんだい』

『うん、はつきり分らんがどこへでもいゝから違つた所に行きたいんだ』

『行つてみれば又嫌になるんだらう』

『ふむ』

秋の陽はてか〳〵と柔かいふくらみの中に一味の寂しさを罩めて照り渡つてゐた。が暫く浴びてゐるうちにもうぼか〳〵とした春の温みが感ぜられた。かなたの白堊は影を投げてゐる梧桐の一葉々々をはつきりと映じて秋の日に照り返つてゐた。吹き過ぎる風がサラ〳〵と側の芋蔓を鳴した。清吉は眼の内側にちく〳〵して續けさまに瞬きをした。

彼は又口を切つた。

『僕は此頃どうも精が出なくなつたよ。仕事をやり乍らも『自分は何の爲こんなことをせねばならぬだらう』などゝ妙な疑ばかり起つてね。何だか自分の本當の仕事が外にあるのを氣付かないでゐると云ふ樣な不安を感じたんだね。そしてそんないろんな疑が一つとして解けないでいつ迄も頭にこびりついてゐるんだ』

山本は病氣のせいに違ひないと思つたが、何と返事していゝか分らぬので只『ふむ』と云つた。清吉は向ふの方で丁度百姓が鳴子をひいて群雀を逐つてゐるのを見て又續けた。

『例へばだね、あそこで雀を逐ひ拂つてるね。然し人間に果して雀を逐ひ拂ふ權利があるだらうか。君は愚

な妄想だと一概にはねつけるかも知らんが、僕は此頃何事も分らなくなつた。『強い者が勝だ』と云つてしまへば夫れ迄だがね。然しもつと廣い立場から考へてだね。人間に生きる權利があるなら雀にもあらうぢやないか。してみると雀が稻を喙むのに無理はないし、さればとて百姓が逐ふのも尤もだし……』

『百姓が作つた以上夫れを喙む者を逐ふのは自明の理ぢやないか。僕は雀を竊盜罪に問ふね』と云つて山本は覺ゐず自分の警句に微笑した。

『ふむ、然し百姓も稻の成長の手傳ひした位に過ぎんぢやないか。第一地に營養が無ければ太らんし、種々成長する力が無くても同樣だし、要するに百姓は天然の物を一時借用し利用した樣なものだからね。してみると、稻も天然の力が土臺なら雀も天然の儘に動いてるんぢやないか』

『ふむ』山本も何だか頭をぐぢや〳〵混雜させられる樣な、頭を惡くさせられる樣な、不快な心持がして、『そんな事はいくら考へたつて何にもならんぢやないか』と云ひ放つた。

今度は『ふむ』と清吉が云つた。そして又昂然として語り出した。

『僕には何も役に立つ立たんが問題ぢやないんだ。便利とか利益とか云ふものを血眼になつて一生懸命追ひ廻す奴等ほど醜いものはないと思ふね。うん、そりやあ彼等は一時は成功するかも知れん。然し彼奴等は云はゞ忠實な番犬と全然一種の機械に過ぎんぢやないか』

『だつて生きてる以上、平凡でも善良な機械として社會に盡したらよからうぢやないか』

清吉は反駁しようとしたが一寸出なかつたので默つてしまつた。眼を逸らした側の桑畑には野蠻人の厚ぼつたい唇を思はせる樣な桑の厚葉が銀色に光つてゐた。

『君は疑と云ふものは起らないかね』とやがて又問ひかけた。
『うむ、そんな餘計な疑はね』
『幸福だね』と云つたのは勿論。半ば反語的な氣分である。
『君は病的だよ醫者に行つてみたらどうだい』
『醫者に何が分るかね』
足許から驚いた樣にばつたがばつと飛び立つた。清吉は屈んで路傍の野菊を折り取つた。櫨の木立で百舌鳥がクヰツ〳〵〳〵と啼いたが姿は見せなかつた。秋の陽は次第に傾いてその平明な空氣の底に段々と蒼味を帶びた寂寥の氣を漲して行き。野を一しきり撫で廻つた風はサラ〳〵と雨の降る樣な響を立てた。高くなつた畑の向ふには農家裏のひよろ長い雁來紅が丁度黑ずんだ眞紅の炎柱の樣に見ゑてゐた。

【Ⅲ】

その後雨天勝であつた反動でゞもある樣に日和が續いた。裏の家では毎日鷄がクッ〳〵〳〵と悅びの聲を上げ乍ら呼び合つたり地を掘つたりしてゐた。其の籬には丈の高いダリヤが金色で大きな花瓣の一輪二輪を覗かせて明るい日ざしに微笑んでゐた。此方の庭では此頃めつきり紅葉した楓が青物を植ゑた畑との境に秋の深んで行つた足跡でも示すかの樣に立つてゐた。山茶花の濃綠の葉の間には淡赤い花を朶み、花壇にはおぢいさんやおばあさんの着かせた竹の杖に凭れて菊がそろ〳〵綻びかけてゐた。閑な折など、清吉は南の方に小机を移して讀書に倦んでは此の場末の天地に搖ぎ初めた秋の景象にひとり眼を慰めるのであつた。

其の晴れた或午前のことであつた。局は喜作の番で彼は午前中休みだつたので朝食後二階で雑誌を擴げてゐたが、臺所の方で朝食の後始末の音が一しきり聞ゐてゐたのが、やがて止んで八重子が裁縫を始める頃だと思つてゐると、思ひがけなく階段に音がして

『水田さん、御邪魔ぢやなくて』と云ひ乍ら、彼女が氣輕に然しいつもの淑やかさを失はない物腰で上つて來た。そして

『これ、ありがたうございました。あなた、此のヒーローの態度をどう思はれて……』と返しに來た小説を差し出し乍ら、輝いた眼を彼に注いだ。

清吉は机に片手を凭せて向き直つたまゝ臆劫さうな又無頓着を裝うた樣な表情をして、『そうですねェ…』と考へる樣に應へた。そしてチラと彼の女の方へ視線を向けた。八重子は束髪にうつすらと氣付かぬ位いの化粧をしてゐて、彼には殊の外美しく見ゐたが、眼は異常に輝いて其の底に曇つた日の海を見る樣な青暗い澁味を湛へてゐる樣であつた。

『何しろ偉いと思ひますね、敗殘者には違ひないが、然し何だか眞の勝利者だと云ふ感じがしますね』と彼は語を次いだ。勿論夫れは毅然たる理想家を描いたものであつた。

『妾しもほんとうに好きでした。こんな雄々しい敗殘者なんどに敗殘者と呼ばれてもいゝはね』と、彼女は豫期した通り共鳴した返答を得たので元氣づいて云つた。

然し清吉にはそう云つた儘濟ましてはゐられない感情があつた。對話など無意識乍ら相手の言葉の欠陷を補はうとするかの樣に何となく相手の言に反對したいものであるが、その上現在の、懷疑に——夫れ丈妥協

的に弛緩してゐる彼には、夫れに無條件な贊成を表するのは氣が濟まなかつたので、

『そうですね。然しこんな眞似はなか〳〵容易に出來ませんよ』と附け加へた。

彼の女は始の答を裏切つて弱いことを言ひ出されたのが不滿で

『何故ですの。こちらの覺悟次第じやありませんか』と云つた。そしてあのあらゆる人々に無理解の儘葬られ乍らも尙一人邁進して止まなかつたヒーローに對する感激を心に繰返した。

『覺悟次第と云つたつて其の覺悟がむつかしいですからね』と清吉は尙自說を固持し乍ら內省して、內心の葛藤に疲れて今は放任的な姑息の妥協をして不安を無理に抑へやうとしてゐる自分とこのヒーローの勇しい徹底的な態度を比べてみたが、こんな態度はかう云ふ小說中の人物か天才でなければ出來ないことだと思つた。そして『世の中に立つて行かうと思つたら嫌な妥協も止むを得ないですからね』と幾分自分を辯解する樣な心持で云つた。

八重子は、『そうでせうか』と疑念を挾む樣に應へた。

私の父もそんなことを云つてたことがありますわ。

……性質は極いゝ人ですがねエ、近年は附合だと云つちや醉つて歸つて亂暴するんですよ。母などこんな事なら以前の方がどれだけましだつたか分らないつてよく歎息してゐましたの。後ではね父はいつも、世の中はお前達の考へる樣に單純には行かないものだなんて苦しそうに辯解してゐましたよ。……でも妾はそうは思ひませんの。少し位苦痛を忍んでも自分の信ずる道を辿りたいと思ひますわ』

清吉は暫らく口を噤んでゐたが眞面目な調子で

『夫れはほんとうですね。私などそう思ふてもなか〳〵出來ないですよ』と自分の弱い意志を省み乍ら云つた。

『そう謙遜しなくてもいゝわ』と、彼の女は少し自分が出過ぎた樣な氣まりが惡い樣な感じがして彼に應へたが、更に話を展開して行つた。『……だつて自分を躙ぢられて默つてゐると云ふことがあるでしようか。今朝來た手紙ね、あれにこんなことが書いてあつたんですよ。あちらの御友達ですがね、其處に元ゐた女中が賣られたんですつて。無口なやさしい娘でしたの。遊びに行つたりするとそれは親切に色々してくれましたわ妾此の便りを見ると腹が立つて、どんな親だか知らないが殺しても飽き足りない樣に思つたんですよ』

『賣るなんて驚いた話ですね』と彼も覺ねず話に釣り込まれて應へた。

『ねゝあんまりひどいわ。いくら親だつて、品物じやあるまいし、子を賣ると云ふ法はありませんわね。それはいゝ素直な娘でしたの。きつと親の云ふなりに何とも云ひ得ないで連れられて行つたに違ひないと思ひますよ。飛んだ犧牲ですわ。多分酒代にでもなつたんでしよう』と眞實腹が立つてゐるらしく言ひ續けた。

『氣の毒ですね』

『ねゝほんと氣の毒どころじやないわ』と虛空を見詰むる樣に少し仰向き加減になつて、『妾何だか氣がむしやくしやするの。女だつて人間ですわねエ、犧牲だの服從だのつていゝ好い加減なものね。男の都合のいゝ樣に揑ね上げた口實よ』と、學校で敎はつた『溫順』道德さへ呪はずに居れなかつた。

『口實はひどいですね』と淸吉は微笑した。

『だつて、男子は我儘よ。……女がもつと醒めてゐたらね』と先覺者でゞもある樣に齒痒さうに考ゐる樣な

眼付をして云つた。

『これからは段々時勢が變つて來るでせう』と彼も調子を合し乍ら。裏の庭に眼をやつた。隣の畑では鷄が三四匹頻りに地を掘じくつてゐた。

『わゝ……でも人間の賣買や娼妓を公然政府で許してゐるなんて餘り野蠻だわねエ。日本でも女の代議士が出て議會で散々やり込めてやつたらいゝわ』

『然しそうなるのは何時のことですかねアメリカでさへ婦人參政案を否決した樣じやありませんか』とつい揶揄が出た。

『でも思つてさへゐればいつか屹度なるものよ。さう成ら成くちや嘘だわ』と尙空想を續けてゐる樣な態度で云つた。

清吉は何だか冷かしたくなつて

『貴方も御目出度い理想家ですね』と冷評した。すると

『お目出度いなんて、貴方は不人情よ』と怨ずる樣な又彼の眞意を讀まうとする樣な眼を向けて、『知つた者の賣られるのを聞ひて平氣でゐられるものがあるでせうか』と反問した。

『不人情と云はれちや弱りますね、じや取消しませうが』と彼は例になく自由に出る自分の言葉を快感を以て味乍ら『……貴方はまだ若いですよ』

『そりや若いのが當り前ですわ。今から態々老いぼれの仲間入りをせなくてもいゝじやありませんか』

清吉も『そうですね』と苦笑するより仕方がなかつた。そして自分の云つたのが間違つてゐた樣な感じもし

又夢を追つてる彼の女を馬鹿らしい樣にも羨ましい樣にも思つた。

彼の女はやがて、『此頃何か出來て』と思ひ出した樣に問うた。

『いや、何にも出來ないですね』

『さうなの以前の詩など大變面白かつたわ。あんなのをもつと見せて戴きたいと思ひますよ』

裏の家で鷄がコケコッコーと寢とぼけた樣なときを作つた。八重子は夫れを機に

『つい長居してしまつたのね。……貴方も下に居らつしやらないね。退屈じやなくて……』と云ひ乍ら下りて行つた。

清吉は心が今まで相當に張りつめてゐたのが突然衝き離されでもした樣に、ポカンとした空洞の樣な感じをし乍ら、見るともなく庭に眼を落した。

【Ⅲ】

ふと氣付くと、何物か鐵の鎧に觸れる樣な感じのする怪物が重しかゝつて『うん〳〵』と渾身の力で壓し付けてゐるのだ。馬乘りにされるので肋の骨が今にもめり〳〵折れそうでその怪物の冷たさが底迄泌み徹つて來る樣に感ぜらる。清吉は死物狂ひになつて悶ゑたが身動きも出來ない。どんな奴か見やうとするがどうしてか魔法にでも掛つてる樣で眼が開かぬ。押へられてる兩手を捩ぎ離そうと焦れば焦るほど却つて益々動かなくなる。みし〳〵怪物の拳が腕に減込む樣である。冷くて痛いほどだ。恐怖が水の樣に漲つて來た。復一しきり悶ゑてみた。そして眼を開かうと『うーん』と力を入れると今度は不思議やぱつと開いた。見れば何

時の間にか怪物は消えてぼんやり天井が見える。物音一つしない眞夜中である。門前の電燈が恍けた樣な淡い光線を送つてゐる。未だ心臟の鼓動がどき〳〵と躍つてゐて、頭から足先にかけてずしん〳〵とひきつる樣な感じがする。怪物がまだそこらの闇に隱れてゐさうに思はれて首を向けやうとするが釘付にでもされた樣で動かぬ。手足も全樣どうしても力が入らぬのだ。今度は又新な恐怖が襲つて來て思はず戰慄した。あゝ此の儘死ぬのじやあるまいか……その瞬間急に目がぐら〳〵して奈落の底に沈んで行く樣に思はれた、と突然自由になつた樣な氣がして首が動き出し、手の神經やがて足の神經も少し宛回復して來た。全身盜汗でぴつしよりなつてる。やがてやつと平生に返つて『は―つ』と熱ぼつたい太息をして、急に『あゝ生きてるな』と泌々に涙の出る樣な感じを覺えた。

彼は床の上に起き上つて回想するともなく思ひ浮べて、何とも云へない凄い陰鬱な氣分に包まれた。以前にも一二度魘されたことはあるが今度の樣なことは始めてである。こんな事があつたらどうするんだらうと思ふ。死の前兆の樣な氣がして眼が無闇と冴えて來る。壁に懸けた局員制服の釦が淡い氣味惡い光を放つてゐる。月が雲間からでも出たらしく、或は今始めて氣付いたのかも知れないが格子の邊に匂ふ樣に流れて來てゐる。と雨戸の外で突然蟋蟀が啼き出した。彼はもう眠るまいと思つてゐたが、自然に眠氣がさして横になると直ぐすや〳〵眠つてしまつた。

翌日は終日頭がぼんやりしてゐた。その後清吉は一層忘れつぽくなつたと思つた。受付の帳簿に記して納めても『今のは書いたかしら』と疑はれ出して、いつも書き落してることはなかつたが、見直してみないと氣が濟まなかつた。清吉はあの夜の事は一言も明さなかつた。なぜか恐ろしくて口に出したくなかつたのである

こんな單調な退屈な局員生活を續けるから惡いのだと獨で斷めてゐた。そして金山の方はどうなつたらうと折々思ひ出しては待ち遠しがつた。あちらにさへ行けば自分の病氣も煩悶も總て消滅し解決される樣な氣がするのであつた。

以前に山本と一緒に來た何とか云ふ男、口元の締つた見るからに意志の堅さうな顏立だつたが、其の男が彼の室に來た折、本箱を見て

『一体どうするんだい。こんな本を集めて』と呆れる樣に云つた事があつた。本箱には古本屋で求めた大部の翻譯物や哲學書等並んでゐた。

『文學なんかやる隙がよくあるね』と云つた。

彼は不快を抑へて『ふむ』と云つた。

山本の話に由ると、その男は英語や數學などやつてるさうで、警察の方に入つて將來警部補とかにはなつてみせると云つてると云ふことだつた。彼は警部補と聞くと『ふゝむ』と笑ひたくなつた。然し實際局にゐても學歷のない者は昇進しても××以上にはなれなかつた。試驗を受けて遞信學校に入れてもらへば幾分違ふが夫れでも大したものではなかつた。彼れには昇進の隙の無い樣に學歷や金力で固められた社會組織が呪はしかつた。彼は學生や富裕らしい人を見ると敵の片割れに逢つた樣な氣がすることさへあつた。然し彼は決して現在の位地に滿足し得る人間ではなかつた。自分は是非共大きな仕事をする責任があると今は無き母の勵ましを思ひ出しては空想した。自分の使命はこんなちつぽけな下らぬ仕事にはないのだ。何か社會一般に大きな貢獻をせねばならないと思つてゐた。その日〳〵の局勤めを勵む事は何故か無價値なものだと思ひ込ん

でしまつてゐたのである。

清吉も此の頃は神經衰弱だと自覺して新聞廣告で知つた其の方の藥を服用してゐたが一寸効能があるそうにも見ゐなくて、夕方になつたり暗闇に對したりすると覺ゐずほろ〳〵と涙がこぼれることさへあつた。何の爲めの涙かは自分乍ら分らなかつたが、只抑へられない勢でぐん〳〵胸が迫つて來るのである。涙には或は母の顏が寫り或は妹——此の頃文通を怠つてゐるが——の顏が寫つた。又ひし〳〵と堪へられない樣な感情で八重子を思ひ浮べ乍ら我と我身をひとりしつかと抱き緊めることもあつた。それから晩になると、相變らず不眠症に拷問の苦痛を嘗めさせられた。無念無想にならうと努むるほど途徹もない邪念妄想が群がり攻めて來て、槌を持つた無數の小鬼が踊り狂つてるかと疑はれる。

或夜やはりこんな苦みの後疲れて來てやつと眠りに落ちてゐたが、どの位經つてからだつたらう、遽しい警鐘に驚かされた。早速雨戸を繰つてみると、市外で數町隔つた彼方で眞赤に燃ゐてゐた。わあつと云ふ叫びが聞ゐる。炎は今打上げた所らしく中天に火の粉を振り撒いて眞赤に染めてゐる。弦月も何だか壓倒されて肩をすぼめてでもゐる樣だ。風が逆つて火の粉が街の方へは餘まり來ぬので勿怪の幸ひだと思ふ。此處彼處の屋根にはもう大分人影が見ゐた。まだ母の背に負はれてゐた時分、其の頃はまだ父が生きてゐたが、或夜近所の空家や秣小屋が燒けたことがあつて、彼が母の背でぶる〳〵慄ゐたので『此の兒は臆病な』と、今から思へば恐怖でひきしまつた顏に强ひて笑を浮べてゐたのだと思へるが、母が淋しく笑ひ乍ら振り向ひたことなど追憶してゐると、隣の主人が屋根の上から

『一躰何が燒けたつぢやかのう。こげん火の粉の多かこつもめつたに無かばい』と聲を掛けた。

『さあ何ですかなあ』と清吉が話してると、『何處だね』と云ひ乍ら、おぢいさんやおばあさん、やがて八重子も上つて來た。さう遠くはないが郡部の村落なので誰も一先づ安堵の胸を撫でた。

八重子は大きな縦縞の入つたネルの寢衣の上から帶をしめてゐたが、寒さうに縮み上つて彼の近くに立つてゐた。顏は驚異と不安のこんがらがつた表情で緊張したまゝじつと動かなかつた。彼は又そは〳〵して妙に落着かぬ心を努めて平靜にしようと苦心し乍ら、折々はさりげなく彼の女を竊ひ見たが、其の月光に照らされた横顏の肌理の細かな頰や襟筋はさながら夢の國から脫け出て來た人の樣に美しく、其の肩から下にかけてのすんなりした曲線美などもいつになくアトラクチブで挑發的な感じさへ與へたのであつた。その緊張した表情にも名狀し難い魅力があつた。彼は自ら身体が固くなる樣な壓迫とゐたいの知れぬ不安に苦しめられた。

おぢいさんは隣の人と、『杉本の屋敷じやないですかな』など話してゐた。隣の人も『うむ、さうかも知れまつせんばい。けちで平素から憎まれちやゐるし』と相槌を打つた。清吉も成程と思つた。そして異常な緊張から他に注意を移し得たのを喜ぶ樣に夫れから夫れへと思ひ續けた。杉本の屋敷は隨分警戒もしてゐた噂だが今度の樣な折によく無事で濟むなと思はれてゐた所である、成金の跋扈と物價騰貴殊に米價暴騰で人心が沸騰して未曾有の米暴動が勃發した直ぐ後頃だつたのだ。彼も不平家だけに反抗と破壞の傾向はかなりひどい方で暴動を是認はしなくとも、富豪が一時に平素振舞つてゐた迫害(?)の仕返しを受けたことを痛快に思つてゐた一人だつた。彼は、同じ人間に生れ乍ら一人は顏に汗して尙生活難に苦み一人は遊んでゐて榮耀榮華が出來ると云ふほど、不合理なことはないと思つてゐた。清吉に云はすれば、富豪は多數の持つべき財

貨を壟斷しても同然のことであつた。で多數の爲めを圖ぬどころか一身の利益の爲め米を賣り惜しんで貯へる樣な奴は天誅の降るのも尤もだと思つてゐた。

『杉本つて何處ですか』とやがて彼の女が訊ねた。

『例の多額納稅議員ですよ。大方倉の燒き打でもやられたんでしやう』と、稍小氣味よげな調子で說明した

『此の頃は金持の厄年さ。私等も少し注意せぬと……』云ひ乍ら『はッ〳〵〳〵……』と、おぢいさんは快活に笑つた。おばあさんも隣の主人も夫れに釣り込まれて笑ひ出した。

『だつて金持だつて燒打されちや困るわねェ』と彼の女は例の考へる樣な風をして云つた。彼はその口調をその身体と全樣曲線美の極致を發揮してる樣ななだらかさやしさだと思はれた。

『はゝ……。なか〳〵金持貧負と見ねますな』と隣の主人が雜せ返した時には、彼の胸には强い憎惡とも嫉妬ともつかぬ感じが湧いて來るのを覺ゑた。

『だつて……』と八重子が夫れに對して云ひかけて口を噤んで了ふと

『おほゝ……』とおばあさんが後を引き取つて『男の方は女と違つて氣がおつよいからね』と云つた。

彼はそんな下らぬ言葉が交されるのを不快に思つた。只何時迄も默つてかうしてゐたかつた。……否出來るなら此處に居るのが八重子と二人だけで——夫れは彼にとつて非常に恐ろしいことに違ひなからうが——そして……震ゑる手と手を互に堅く握り合つて喘ぐ許りの接吻と抱擁がしたかつたのに違いない。

喜作は晝間の疲れで到頭覺めなかつた。

『喜作さんはよく眠つてることね……』とやがておばあさんが起さずに置くのを不親切とでも思ふ樣な風で

八重子に云つた。

『でも起したつてつまらないわ。却つて氣の毒だわ』と、彼の女は尙動きたくなさゝうにその儘赤く爛れた空に眺め入つて居た。

清吉は彼の女が喜作を起しに行かずにその儘居てくれるのがこよなくうれしかつた。そして八重子の態度を彼に對する好意からだと思ひたかつた。

やがて火の粉も段々に鎭まり空の反映も薄らぎかけた。

『夏祭り打上花火ぱつとして消えたり心ひたに淋しも……いゝ歌ね』と、彼の女はふと思ひ出したらしく低い聲で云つた。清吉の舊作である。何やら首を絞め付けられる樣な落着かない淋しさがぐつと彼を襲つて來た。彼は何とか云はうと思つたが到頭出なかつた。

『急に寒くなつた樣だね』と、おぢいさんは先に立つて下りて行つた。先刻迄おぢいさんと話してゐた隣の主人もゝう屋根には見えなかつた。

清吉はひとり欄に立つてなほいつ迄も空を仰いでゐた。嬉しい樣な物足らない樣な又氣が咎める樣な色々な錯雜した感情が、戰いてゐる彼の胸を夕立雲の樣に忙しく遽しく往來してゐた。清らかな夜空には星がキラ〳〵と瞬いてゐた。

【V】

清吉の神經衰弱は依然として變らなかつた。深夜のある發作が二度目に此の前より輕くはあつたけれども

襲つた時は、恐ろしくなつて翌日直ぐ醫者に行つた。醫者は『かなり過勞されてる樣だ、少し休養されるがいゝ』と話して營養療法や運動を勸め散藥を呉れた。

『水田さん貴方は晩よく魘されてゐらつしやるわ』と八重子は度々氣懸りそうに云つてゐたが、清吉の病狀を聞かされた時はかなり驚いた樣子だつた。そして自分が特別に忙しいのは朝丈位だから代つて爲るから遠慮なしに一ケ月許り靜養する樣にと勸めた。どうしようかと色々心を痛めてゐた清吉は胸に秘めてゐる自分の戀を許容してでもくれた樣にその好意が泌々嬉しかつた。そして遊んでゐて食はしてもらうのが何だか氣が濟まなかつたが、已むを得ぬのでおぢいさん等に相談してさうさして戴くことにした。

清吉は能く歌集など手にして近郊を散歩して廻つた。もう秋も深んで麥は刈り取られ黄ろく熟れた稻は刈手を待ち佗び顏であつた。稍碧味の薄らいだ空には渡り鳥が群をなして南へ〳〵と飛び去つて行つたりした森かげなどを歩いてゐるとバサツ〳〵と落ちるものがある。その音が如何にも物淋しくて、彼は屢々立ち止つては耳を傾け乍ら涙ぐましい氣分になるのであつた。世間の總てから見捨てられた孤兒の樣に感ぜられて『天地によるべなき身の我なれば悲しき時は死を思へかも』など歌つたこともあつた。又時には世の中で最も愚な欠點だらけの不具な人間だと思はれて、身心共に健全な人を見ると強く壓迫される樣で、どうしても街に出る氣がしなかつた。八重子の事はあれ以來特に強く頭に刻み込まれてもう戀心と名付けていゝ樣な妙な氣分に始終包まれてゐた。然し小心で臆病な清吉は勿論其の情を殺さう〳〵と努めてゐた。以前にも繰返し〳〵自分に說諭してゐた通り第一彼の女を思ふと云ふことは彼にとつてどうみても僭越に思はれたし、經濟上から云つても結婚の出來る身分になるのは何時の事か分らなかつた。そして自分の愛の動機が彼の用語で云へ

ば純な戀愛の外に不純な性愛、性慾の妄動を含んで居はしないかと顧みる時には、自分の傳襲的道念に對して尙更强くは主張されないと思つてゐた。だが、懷疑に傾ひてる彼が、近來その道念の權威にも疑を挾むことのあるのは事實で、此の感情と本能が人間の少なく共一部の要素となつてる以上さう虐げる必要はないではないかと云ふ感情論が烈しく頭を擡げてゐた。そして今では『成る樣に成れ』と捨鉢な心にもなつたりしつゝ、若し實際八重子が自分を愛してゐてくれたらと、その論據になりそうな記憶など色々繰つてみたり、又それかと思ふと『自分の樣な者がどうして愛される資格があらう』と極度の自己卑小感に陷つて悲觀したりし乍ら、純な戀の歡樂をひとり追つてゐた。折々は、小學校時代の級中誰一人自分の右に出づる者はないのだと只無邪氣な優越感に浸つてゐた頃の奔放な空想と、現在の慘さを引比べて感傷に沈むこともあつた。今は彼か虐げられた優越感の鬱憤は只僅に雜誌に發表する短歌等に依つて慰められるに過ぎなかつた。

山本とはその後一度連れ立つてスケッチに行つたが、どうせ病的だと思はれる丈だと思つてもう下らぬ議論を交さうとはしなかつた。然し靈に對する憧憬と肉に執着しようとする情性との矛盾葛藤は、屢々彼をしてかの灰色の懷疑の隱家に――それはやがてどうでもよいと云ふ投げやりなデカダンの氣分に誘ふのであつたが――一時の偸安を盜ませようとするのであつた。

或朝八重子が封緘葉書を持つて上つて來た。彼は机に凭つて知人から借りて來た畫集を眺めてゐたが、愛人から受ける所の例の特有な不安と壓迫感を强ひて押隱して、何氣なく夫れを手に取つて裏返すと、思ひきやかの友人の便りであつた。近來金山の空想は戀と關聯して發展してゐて、そのうち金山に行ける樣になるとすればほんとに幸だと思つてゐた。此の家や八重子には名殘惜しいが、戀は忘れよとの天の聲として思

ひ切つて潔く新生活に入つて行かうと考へてゐた。又万一出來なければ當分留るより外はなからうが、心の底では八重子が居るからと幾分心を慰ませてゐたのだつた。だが一人前にさへなればどうでもなると云ふ氣があるので前者を渇望したのは無論の事である。然しその便りは彼が恐れてゐた通り斷りの手紙であつた……伯父は自己の勢力を扶植するなど疑はれる事業がやり難いので一切推薦はやらぬことにしてゐるから……と云ふことや、欠員の候補者なども多くてなか〳〵一存では採用出來ないと云つて來たことなど、大變氣の毒さうに辯解して書かれてゐた。然し彼にはもうそんな辯解は不用であつた。只彼の勝手がましい妄想に對して手酷しくも下された皮肉な結末に茫然としてゐたが、やがて蒼い顔の神經がピク〳〵と痙攣する樣に見ゐた。と、突然我にもあらず『ハッ〳〵〳〵〳〵』と輕い空疎な笑ひが込み上げて來た。夫れは自己を極度に虐待して味ふ難行苦行の快感に似た感じでもあり、愚な自己を大喝して冷殺した樣な澁い小氣味好さでもあり、又自分はどうしても身動きの出來る樣にされてるんだと思ふ、ひし〳〵と食ひ入つて來る所の淋しい悲しい頼りなさの樣でもあつた。　―【完】―

――（大正七年十月）――

五箇條の御誓文

（懸賞文三等）

一、三、丙　中野峯夫

（一）緒論

吾人の目的は『よりよく生くる』といふ事に限られてゐる、幸福なる生活を營む事が吾人の唯一の目的であり